第58回夏季県外史跡踏査　栃木県・群馬県方面（栃木市・館林市・佐野市・太田市・足利市・日光市）
近代日本における産業化の光と影～渡良瀬川流域と足尾銅山に足尾鉱毒事件の歴史的な意味を探る～
踏査報告・秋季研究発表会記録

川崎市立川崎総合科学高校　　**阿部　功嗣**

はじめに

足尾銅山から渡良瀬遊水地にかけての渡良瀬川流域は、豊かな天然資源と農業生産に恵まれた地域であったが、明治・大正期において時間的にも地域的にも広く住民を巻き込む足尾鉱毒事件の舞台ともなった。本踏査の目的は、産業・経済・政治・社会・環境史と様々な視点からその歴史的意味を探究してきた現地の講師とともに現地を踏査することで、日本の近現代における足尾鉱毒事件の歴史的意義を探究し、「高校生たちが自ら考え行動する力」を育む授業に役立てていくことである。

第１日目(8/4)：川崎→柳生→三県境→渡良瀬遊水地〔合同慰霊碑・谷中村遺跡等〕→（田中霊祠）→雲龍寺→昼食→佐野市郷土博物館→小中〔田中正造旧宅・田中正造墓等〕→祈念鉱毒根絶の碑→足利　　宿泊地：ホテルルートイン足利駅前

第２日目(8/5)：足利→(岩宿・草木ダム)→通洞〔古河足尾歴史館・足尾銅山観光等〕昼食→小滝→旧松木村→本山〔龍蔵寺・製錬所跡〕→間藤→足尾〔事務所跡等〕→横浜

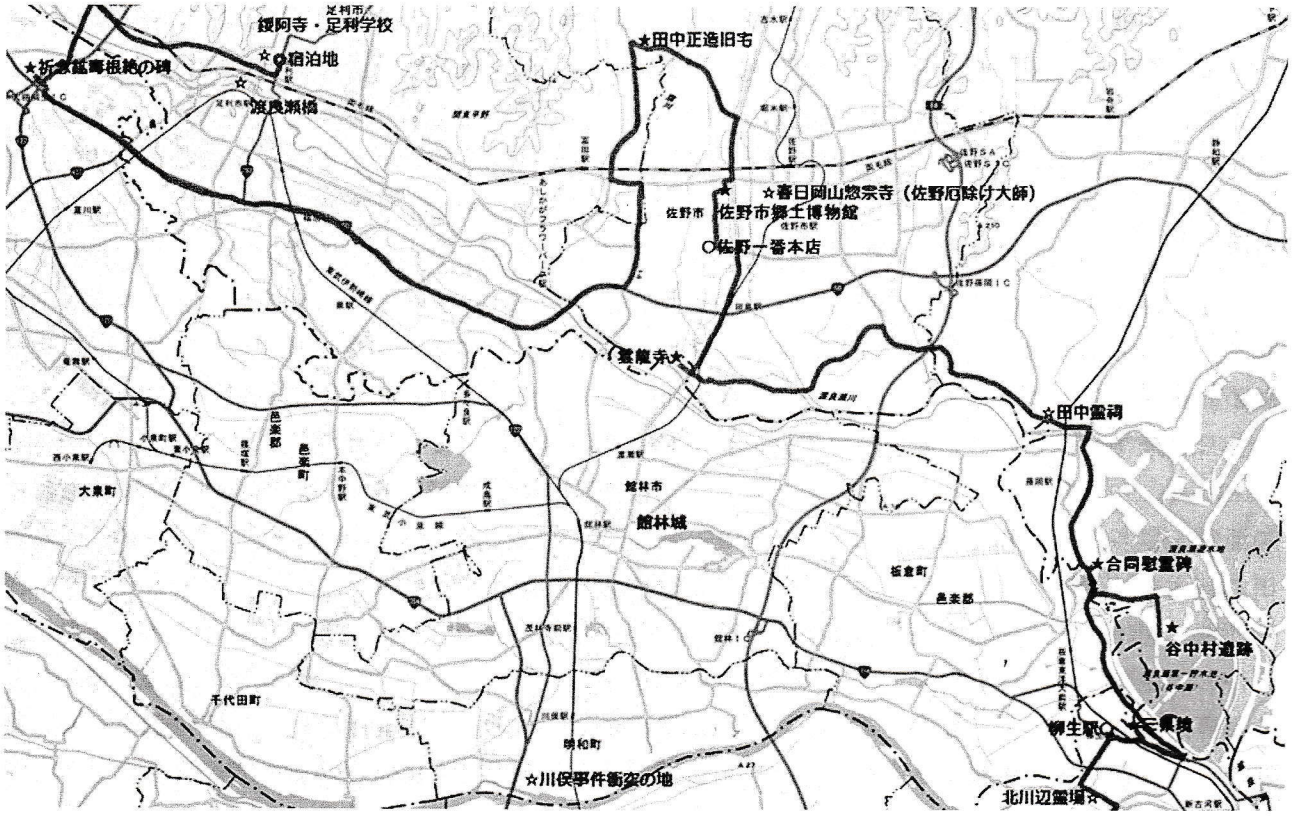
講師：坂原辰男（田中正造大学事務局長）・山田功（足尾まるごと井戸端会議代表）他

１．足尾鉱毒事件被害地と田中正造関係史跡の踏査～渡良瀬遊水地・旧谷中村から毛里田にかけて

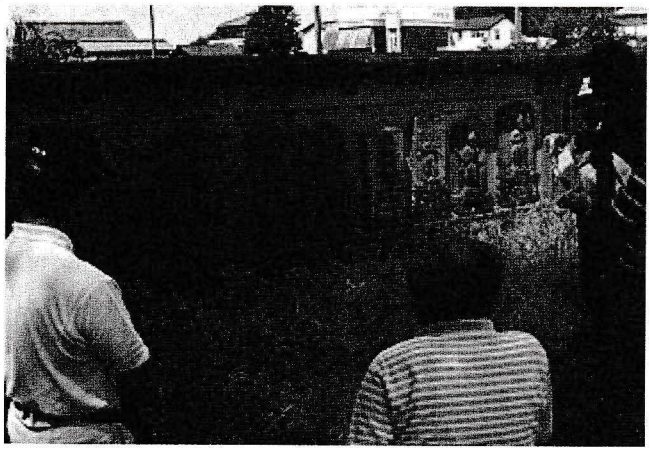
東武日光線柳生駅で坂原先生と合流し、バスで駅北東側の群馬・栃木・埼玉三県境へ向かった。三県境はかつて渡良瀬川と谷田川の合流地点であったが、大正７年(1918)の渡良瀬遊水地建設にともなう川筋つけ替え工事で乾陸化し標柱が立てられた。下見で出会った住民によると、20年ほど前からまれに地理愛好家が訪れていることに気付き、耕地のど真ん中ではあったが歩いて入れるよう周囲を整備してきたとのこと。その住民はかつて谷中村強制移転を余儀なくされた村民の末裔だった。

5km走ると５回県境越えをすることになる県道９号佐野古河線を北上し、渡良瀬遊水地堤防に隣接した谷中村合同慰霊碑敷地へと入った。昭和46年(1971)住民の要望もあり、国によって慰霊碑が建立された。谷中村に散在していた墓石、庚申塔、地蔵尊など300を超える石碑が集められ、慰霊碑の四方を取り囲む塀の内側のコンクリート壁に埋め込まれていた。坂原先生の「十字架に打ち付けられたイエスのようだ」という言葉からも、国家の犠牲となった住民たちの忸怩たる思いが肌身に伝わってくる。居住まいを正し足尾鉱毒事件について真摯に学ばねばならないと思いを新たにした。遊水地中心部に位置する旧谷中村遺跡には、村役場跡の一帯だけで村民宅跡でもある水塚が約50残る。遊水地建設計画ではこの一帯も湖水面下となる予定だったが、村民の信仰厚い雷電神社や延命院跡地があり、「谷中の聖地」を守ろうという住民の運動があって現状のままとなった。墓石のほとんどは合同慰霊碑へ移されたが、延命院跡の水塚周辺に数基が残され谷中村民の子孫が今でも大切に守っている。

旧藤岡町中心街を抜け県道９号を渡良瀬川沿いに西へ向かう。大正６年創建の田中霊祠は、６カ所ある田中正造分骨地中で唯一神社として宗教法人化が認められ、谷中村強制移転を戦った住民の子孫が田中正造を敬い祀っている。境内には大鹿卓撰文による石碑などが立つ。大正２年(1913)に正造が息を引き取った終焉の間を残す庭田家を通過し、明治29年(1896)正造が栃木群馬両県鉱毒事務所を置いた雲龍寺に到着した。山門をくぐるとすぐ、正造墓、足尾鉱毒被害者救済施療所である救現堂に並び、昭和47年(1972)に建立された足尾鉱毒事件被告之碑がある。被害民は明治33年(1900)鉱毒被害

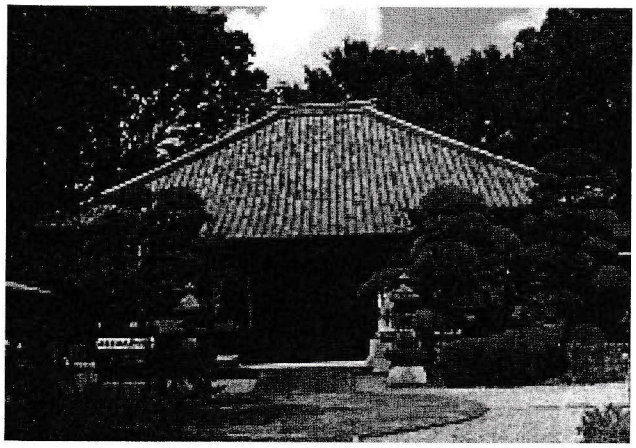


1．１日目の踏査行程地図〔渡良瀬遊水地周辺～足利周辺〕

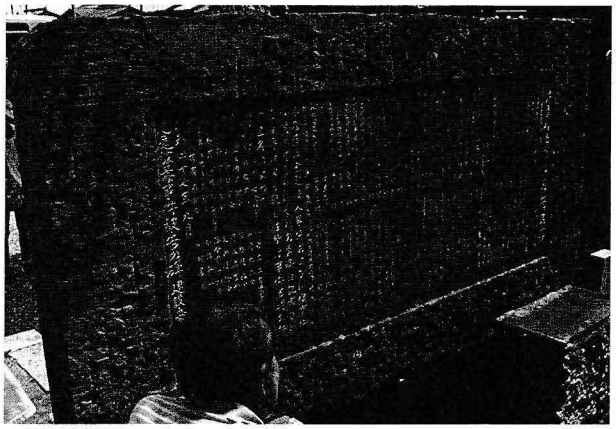


2．谷中村合同慰霊碑・石碑群

3．旧谷中村遺跡・延命院跡



4．雲龍寺・本堂（栃木群馬両県鉱毒事務所）



5．雲龍寺・足尾鉱毒事件被告の碑

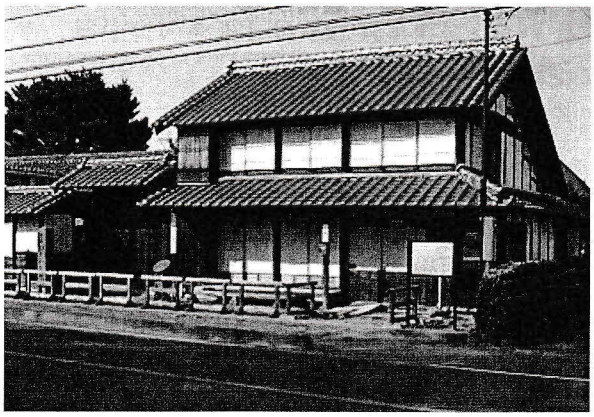
を国に訴えるためこの地に集結し「押し出し」を行ったが、利根川北岸で警官隊らにより鎮圧された。川俣事件で国から被告・罪人とされた被害民たち一人一人の名を刻み、その功績を顕彰している。

昼食休憩後、正造関係資料が豊富な佐野市郷土博物館で鉱毒被害の全容と正造の戦いについて坂原先生より解説を受けた。平成26年(2014)に、現上皇・上皇后両陛下はここで博物館所蔵の直訴状と対面し最後まで目を通された。明治34年(1901)、正造が貴族院前において明治天皇へ直訴してから113年目のことだった。博物館を後に正造生誕地である旧小中村へ向かった。県道に面する田中正造旧宅には、江戸時代に六角家領の庄屋として、明治維新後はジャーナリストや県会議員としてこの地で活躍した正造の事績が展示されている。施設を管理する小中農教倶楽部理事の篠崎勝宏先生より、地元民の教育や暮らしの支えとなった正造の活動、カツ夫人や家族との生活について聞いた。

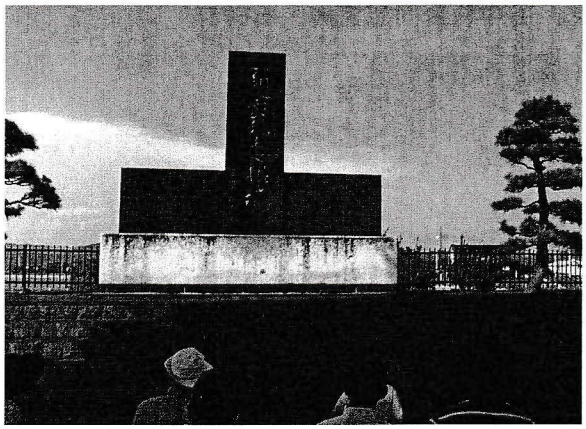
1日目最後の踏査地・太田市毛里田は、太平洋戦争中の増産によりに拡大した鉱毒被害や、戦後のカスリーン台風等の洪水被害に苦しんだ渡良瀬川下流域の被害民が、鉱毒根絶期成同盟会を結成しその活動の拠点とした地である。昭和33年(1958)に足尾の源五郎沢堆積場が決壊し、渡良瀬川流域の水田に甚大な鉱毒被害が発生した。当時村議会議長であった板橋明治はこれを機に同盟会会長となり、古河鉱業を相手に総理府中央公害審査会へ農作被害賠償調停を請求した。昭和49年(1974)、足尾鉱毒事件の発生から約90年を経てついに国が古河鉱業を原因企業として認め、被害民への損害賠償を命じる調停が成立した。土の文字を象る祈念鉱毒根絶碑には「苦難継ふまじ　されど史実は伝ふべし　受難百年また還らず　根絶の日ぞ何時」という板橋明治の言葉とともに、我が国公害の原点ともいえる足尾鉱毒事件に連なり、その鉱毒根絶運動を絶やさなかった人々の名が刻まれている。

6．佐野市郷土博物館・田中正造展示解説

7．佐野市郷土博物館・田中正造銅像前



8．田中正造旧宅・隠居所外観

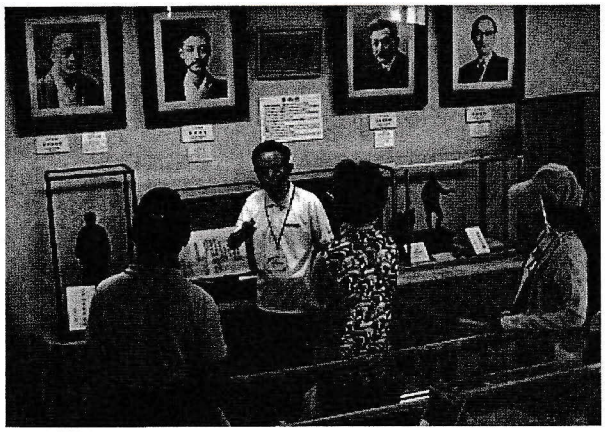


9．祈念鉱毒根絶碑

2．足尾銅山と古河鉱業が残した近代化遺産の踏査～通洞・足尾から本山・旧松木村にかけて

２日目、宿泊地足利を出発して森高千里の歌で有名な渡良瀬橋を渡り、岩宿を経由して国道 122 号(銅街道)を北上した。昭和 52 年(1977)完成の草木ダムは、カスリーン台風を機に計画され、洪水対策とともに上流からの鉱毒をせき止め沈殿させる役割も果たしている。ハーモニカ長屋とも呼ばれる鉱山住宅や現在も鉱毒被害予防に重要な役割を果たしている中才浄水所や、通洞変電所・動力所跡、新梨子油力発電所跡など明治末から昭和初期に建設された鉱山関係施設を車窓より見学し、通洞の古河足尾歴史館へ到着した。長井一雄名誉館長によると、展示歴史・民俗資料のほとんどは、鉱山関係者を一人一人訪ね歩き足尾の歴史を残すためと言って頼み込み譲り受けた物だという。入り口付近に展示された足尾銅山坑道図を見ると、備前楯山の内部はまさにアリの巣状となっており、その総延長は東京から博多にまで達する距離だという。明治 24 年(1891)の産銅量は 7547t となり全国の約 40%を占めるようになった。明治 39 年(1906)に銅の電気精錬に成功し、大谷川の水力発電をもとに古河電工日光事業所を設立して銅線の生産を拡大した。古河の電気設備により足尾の夜は東京よりも明るいと言われ、山あいのこの地は人口 3 万人を越す最先端かつ国内有数の工業都市へと変貌を遂げた。

館外で山田功先生と合流し通洞坑跡を利用した足尾銅山観光へと向かった。トロッコ列車で入坑し、暗く狭い坑道内でカンテラの明かりを頼りに行われた江戸時代の手掘りから、高度な削岩機を用い、エレベーターや鉄道を張り巡らせ安全性と効率性を高めた現代の機械採掘までの変遷を見学した。施設の後半部は資料館となっており、採掘、選鉱、製錬の流れと、足尾で技術革新が実現した削岩機やエレベーター、鉄索網、公害除去などの技術について詳しく聞いた。「安全専一」をスローガンとしたのも古河がわが国最初であったし、福利厚生組織である三養会は日本初の「生協」であった。

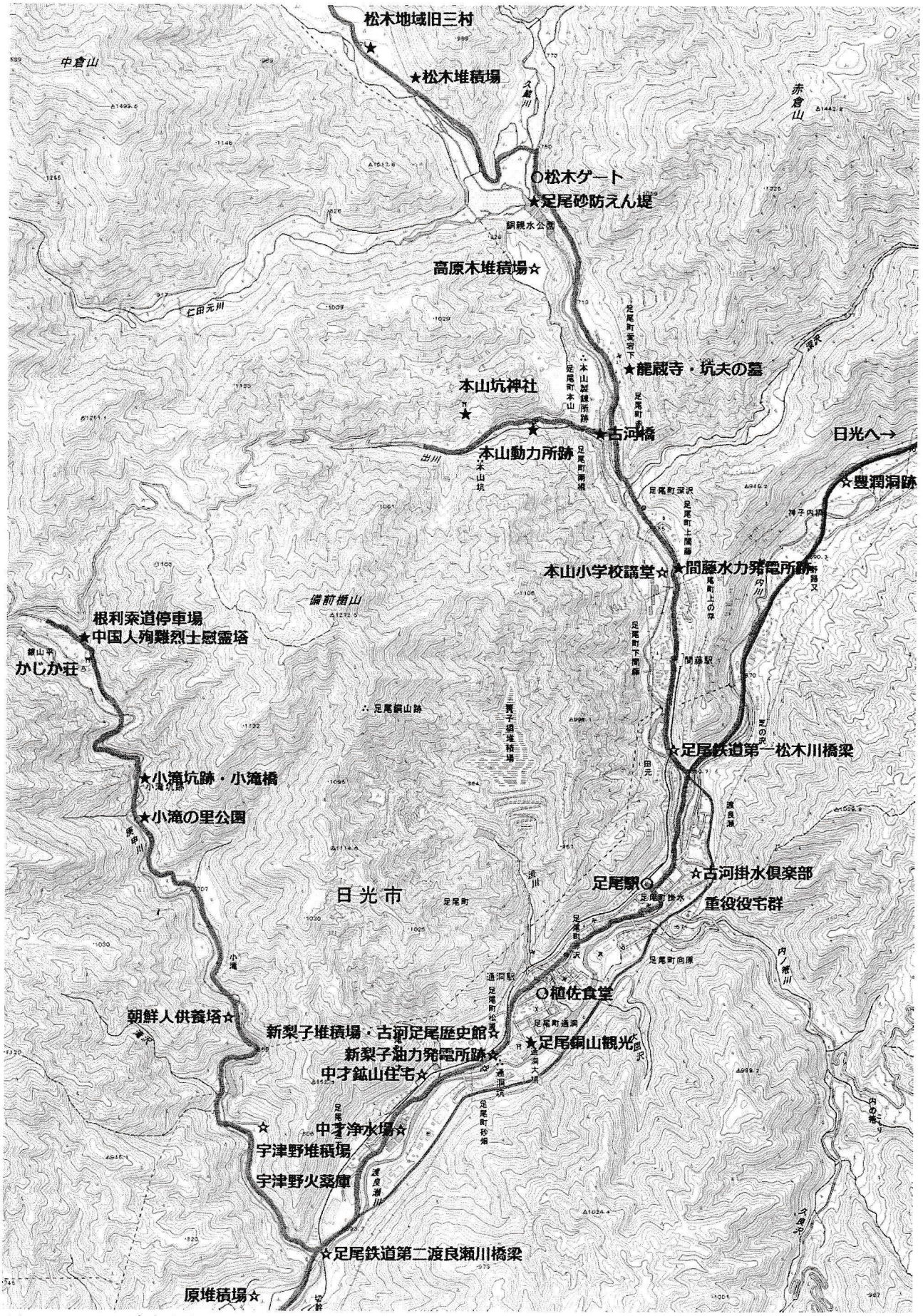


10. 古河足尾歴史館

11. 足尾銅山観光・資料館内

12. 小滝の里・銀山平

13. 中国人殉難烈士慰霊塔・基部の丸石



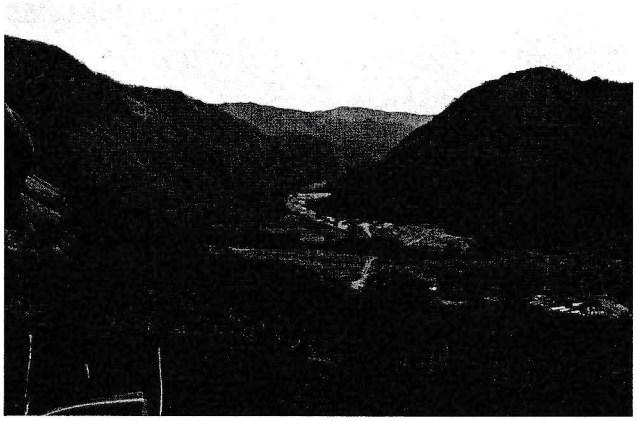
14. ２日目の踏査行程地図〔通洞・小滝・足尾・間藤・本山・旧松木村〕

昼食後は庚申川を遡り小滝の里へ。皇海山の前衛峰である庚申山は日光山と同じく勝道上人開山で、庚申信仰の総本山とされる。備前楯山南麓の庚申川沿いは江戸時代庚申講の参拝客で賑わった。明治19年(1886)の小滝坑開坑以来、この沢に製錬所や貯水場、鉱山住宅や小学校、病院などが次々と建設され、最盛期小滝集落人口は1万を数えた。それらもいまや苔むした石垣・礎石を残すのみとなっている。田中正造も視察に訪れた沈殿池跡や小滝坑入口、鉄橋、坑夫浴場跡などを車窓から見つつ中国人殉難烈士慰霊塔に到着した。日中共同宣言を機に、昭和48年(1973)第二次世界大戦中河北省より連行された中国人257名のうち、足尾で亡くなった109人を弔うための慰霊塔が建てられた。塔の基部には足尾の小学生が下流の河床から運んだ人頭大の丸石が109個埋め込まれている。鉱山坑道の支柱をはじめ大量に使用される木材は足尾だけでは調達しきれず、群馬県片品村や利根村方面から切り出され、鉄索で銀山平の製材所に運ばれた。小滝には当時約1500名の朝鮮人労働者集落もあり、朝鮮(韓国)併合後の大正期以降、製材や荷運びなどの重労働を担った。古老の話では、朝鮮人の子どもたちも日本人の子どもと同じ小学校に通い共に学んだという。戦後の分断独立の影響もあり、鉱山労働で亡くなった朝鮮人の供養塔は木製で、中国のものと異なり未だ恒久的な碑の建立が実現していない。

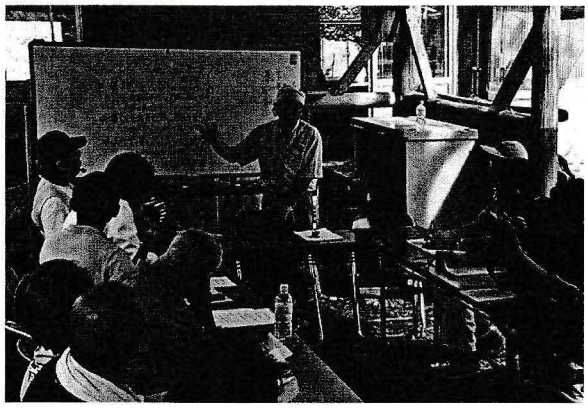
再び渡良瀬川を遡り、足尾、間藤、本山を通過して足尾砂防ダムへ。その上流にかつて存在した松木村は、勝道上人により8世紀末に山岳信仰の修行地として開かれた伝承を持つ。明治初期まで豊かな山の幸と農作物の収入で村はとても潤っていたが、明治17年(1884)本山に製錬所が建設されると、亜硫酸ガスによる煙害で樹木、農作物の枯死が目立ち始め、明治20年(1887)「松木の大火」で村域から本山にかけての大部分の植生が失われた。その後銅の増産とともに煙害も拡大し、平成に至るまで岩肌がむき出しの荒涼とした景観が広がることとなった。現在は古河や国による植生回復事業、NPOによる植樹活動が進み徐々に緑を回復しているが、豊かな植生を支える土壌も含めた生態系の回復が成るのは何十年、何百年先になるのか確実な予測は不可能とする専門家もいる。

再び本山に戻り、愛宕下の龍蔵寺で無縁石塔や坑夫の墓を見学した。鉱山では坑夫が死んでも墓を建ててくれる親類がいない場合が多い。そこで、子分や弟分が共同で親分や兄分の墓を建てた。こうした鉱山特有の相互扶助の仕組みは全国の鉱山で江戸時代末期には成立しており、古河のもとで友子制度として発展した。明治40年(1907)の足尾銅山争議をはじめ、以降頻発した争議を経て戦後の労働組合組織完成につながる歴史について解説を受け、墓域の斜面から対岸の本山製錬所跡地を一望した。日本の近代化を牽引した貴重な近代産業遺産は、シンボル的な大煙突や貯硫タンクを除きほとんどが解体され残っていない。明治24年(1891)架橋で日本最古の道路鉄橋である古河橋や残された製錬所建物の外観を見学し間藤へ向かった。バス車窓から社員子弟の教育のために創立された本山小学校の講堂、ジーメンスから輸入して明治23年に完成した日本最初期の発電施設である間藤水力発電所跡などを見学し、わたらせ渓谷鐵道終着駅である間藤駅に到着した。駅前の古河キャステック敷地内に古河鉱業の間藤工場・工作課時代から使用されているレンガ積み建物などが残されている。この地でエレベーターやロープウェイ、削岩機など、日本の近代化を支える多くの技術が生み出された。

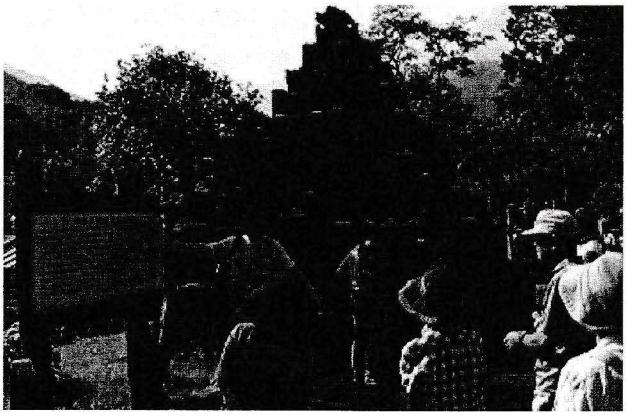
最後の踏査地足尾駅周辺は、かつて足尾鉱業所事務所などが所在し足尾銅山の中枢であった。迎賓館として使われた明治32年(1899)建築の掛水倶楽部建物や重役役宅などが現存している。辰野金吾事務所が設計した事務所建物は移築され、足利市役所庁舎として使用されたのち解体され現存していない。古河足尾歴史館に事務所ジオラマが展示されており、古河機械金属によってその復元と現存する付属書庫や周囲の建物を含めた博物館化構想が持ち上がっている。足尾の人口は平成29年に2000人を下回り三養会も解散した。歴史遺産を生かしたコミュニティやインフラ維持への住民の期待は高まり、具体的で迅速な行動が必要とされている。歴史教育が果たす役割について考えさせられた。



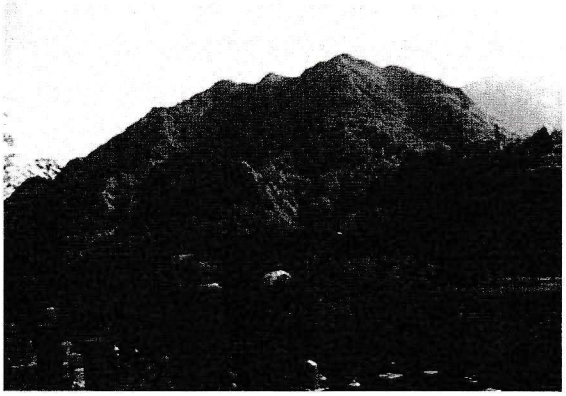
15. 旧松木村・カラミ堆積場(3 月下見時撮影)



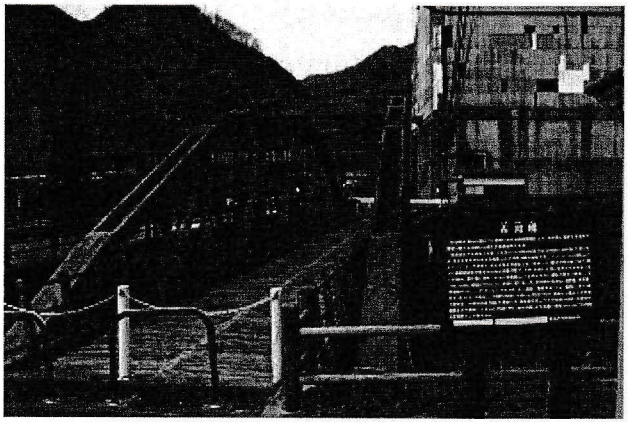
16. 森びとプロジェクトより植樹活動説明



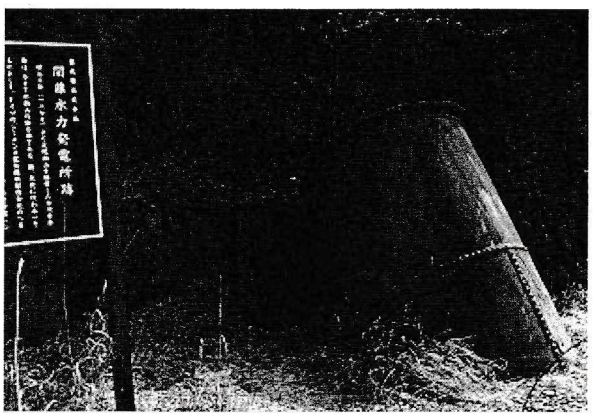
17. 龍蔵寺・無縁石塔



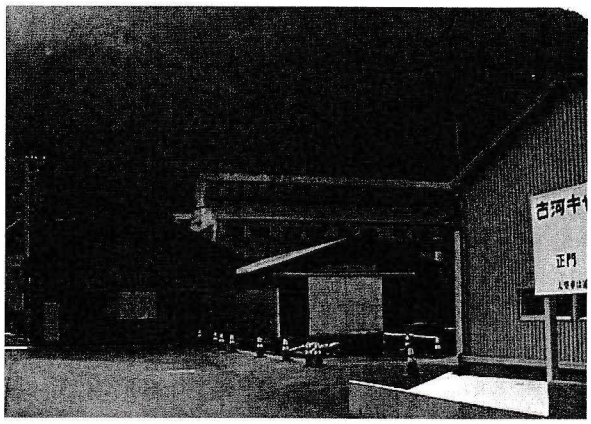
18. 本山製錬所跡と備前楯山



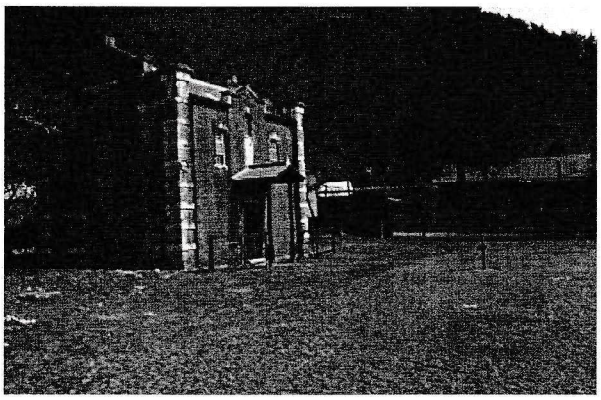
19. 本山・古河橋(3 月下見時撮影)



20. 間藤水力発電所跡送水管



21. 間藤・旧工作課



22. 足尾鉱業所事務所跡と付属書庫建物

３．踏査で得た資料の「高校生たちが自ら考え行動する力」を育む授業への活用

高校日本史において足尾鉱毒事件は、近代国家成立の締めくくりとして近代産業発展の一側面、社会問題・社会運動の中で取り扱われる。また、政商から財閥へ、軽工業から重工業へという近代産業構造の「発展」は、二つの世界大戦で大きな影響力を持つに至った日本の基盤形成として位置づけられるも、政治史中心の高校日本史教科書の記述としてみると、ともすれば軽視されがちな部分である。しかし開国、敗戦と二つの画期を乗り越え社会の在り方を大きく変え発展してきた日本にとって、未来の日本社会を担う高校生たちに、民衆の一人、当事者としてこの歴史的事実にしっかり向き合い考えさせる機会を与えることはとても重要な事ではないだろうか。

本踏査の授業への活用は、日本史Ａで当該範囲に対して１時間の講義形式授業ののち、班に分かれて調査・準備時間を２時間とり、最後に１時間のディベートを行うという構成で実施した。主題は「足尾鉱毒事件に際して国家はどのように対処するべきであったか、当時の歴史的・社会的状況を前提として政策を立案する」とした。一方は渡良瀬川流域に居住する農民としての立場。もう一方は足尾銅山の経営者としての立場。共通の基礎資料としては、以下の田中正造直訴文(抜粋)と足尾の産銅量変遷等古河鉱業関係資料を提示した。また、調査・準備の時間には、踏査で得た画像やパンフレット、参考文献のコピーを参照できるように用意した。

立論では、農民班は田中正造をイメージして、根本的な被害根絶のための操業停止を訴え、財閥班は古河市兵衛や陸奥宗光をイメージして、欧米列強に対抗する国家形成のために操業継続を前提とした和解案を提示した。主題は政策の立案であったため、双方の質疑応答の後に反駁で具体的な政策を再提示するよう助言した。議論が進むうちにそれぞれの政策の共通点が浮かび上がり、決着は双方が歩み寄った一つの政策が形成されるという形となった。本授業の目的は歴史的事象を題材に主体的に考え自ら行動する力を培うことにあったため、ディベート自体に勝敗はつけず、本ディベートを通して感じ考えたことや今後の自らの行動にどう生かすかをレポートにまとめさせて評価を行った。

授業の感想には「いつか自分も渡良瀬遊水地や足尾銅山を実際に訪れてみたい」というものが多くみられた。また、新課程における「時代を通観する問い」の設定と探究的な学習の構成に、史跡踏査によって得た資料を活用する事が有効であることを確認した。本踏査にご協力いただいた現地講師の皆さまや関係諸機関に深く感謝する。

資料１　田中正造直訴状　抜粋・現代語訳

（前略）つつしんでこれからご説明いたしますが、東京の北方四十里ほど離れた所に足尾銅山があります。近年、西洋技術の導入で工業に使用する機器が発達するにつれて、毒の流出がますます多くなりました。現地では銅を採掘したり、製錬したりすると気の毒水と毒を含む廃石が谷を埋め渓流に注ぎ、渡良瀬川に激しく流入して沿岸が被害を受けております。その上、毎年山林を乱伐し、煙毒が水源の草木を枯らしたため、川の流路が激変し、洪水の水位が数尺高くなりました。鉱毒水は四方にあふれ、毒の沈殿物は茨城・栃木・群馬・埼玉の四県及びその下流数万町歩に達しております。魚類は死に絶え、田園も荒廃し、数万の人民のうち財産を失う者、農業を続けられない者、あるいは失業して食事もとれず病気になっても薬の無い者もおります。老人や年少者は水辺の低地に倒れ、働き盛りの者は故郷を離れて他国をさまよっています。このように、二十年前の実り豊かな耕地が、今や見渡す限りの枯れたカヤとアシだけの悲惨な原野となった地方もあります。（中略）このような結果、すでに国家の収入は数十万円減少し、今後は幾数億千万円の減収が予想されます。現在でも公民権を失う者は数えきれず、町村の自治は全く退廃し、貧苦や病気及び鉱毒による死者は年年増え続けております。（中略）まず渡良瀬川の水源を清めることが第一です。川の流路を修築して元どおり天然の姿に戻すことが第二です。猛毒の土を除くことが第三です。沿岸の計り知れない天産物を復活することが第四です。退廃した多数の町村を回復させることが第五です。猛毒を出す鉱業を停止させ、毒水と有毒の廃石の流出を根絶することが第六です。このようにしてこそ、数十万の生命を救い、居住・相続の基礎を回復し、人口の減少を防げます。同時にわが日本帝国憲法及び法律を正当に実行して各自の権利を保持させ、将来の国家の基礎である無量の勢力及び富財の損失を断絶することができると存じます。（後略）

23 田中正造直訴状の本文抜粋

	足尾生産量 A（t）	全国生産量 C（t）	A／C（%）
1881(明治14)年	172	4669	3.7
1883(明治16)年	647	6775	9.5
1885(明治18)年	4090	10541	38.8
1887(明治20)年	2987	11064	27.0
1889(明治22)年	4839	16254	29.8
1891(明治24)年	7547	19033	39.7
1893(明治26)年	5165	18015	28.7
1895(明治28)年	4898	19114	25.6
1897(明治30)年	5298	20389	26.0
1899(明治32)年	5763	24276	23.7
1901(明治34)年	6320	27392	23.1
1903(明治36)年	6855	33187	20.7
1905(明治38)年	6577	35495	18.5
1907(明治40)年	6349	38714	16.4

24 足尾銅山の産銅量の変遷